

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：22302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00958

研究課題名（和文）古墳に由来する文化的景観の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on cultural landscapes derived from ancient tombs

研究代表者

築瀬 大輔（YANASE, DAISUKE）

群馬県立女子大学・群馬学センター・教授

研究者番号：90822924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：地域共同体の中で古墳（塚）として認識されてきた遺跡から歴史民俗の情報を取り出し、それを古墳の二次的利用・二次的あり方として類型化することで、古墳を現代に続く生活・生業史の中で位置づけるとともに、古墳に由来する文化的景観の概念を構築できることを確認することができた。古墳の二次的利用・二次的あり方とは、A類型：交通機能・地域拠点・生活拠点としての利用とあり方、B類型：生産手段・資源としての利用と利用、C類型：公共的な場としての利用とあり方、D類型：象徴的・神聖的・異界的・境界的な場としての利用とあり方の4類型をいう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古墳はこれまで、主に古墳時代の政治・文化の究明のために、考古学的方法によって遺跡として資料化され、価値付けされてきた。しかし実際には、古墳は古墳時代に限らず、長く現代まで、地域の中であって地域の人びとの生活や生業と関連づけながら活かされ、残されてきた景観構成要素としての側面がある。本研究はそのことに注目することで、古墳の歴史民俗資料としての価値を明らかにし、典型的に示すことができた。これによって、古墳の文化的景観（生活・生業によって形勢された景観）の構成要素として捉えることが可能となり、古墳の学術的可能性と価値を広げることができた。

研究成果の概要（英文）：By extracting historical and folkloric information from ruins that have been recognized as kofun (mounds) within the local community and categorizing them as secondary uses and ways of kofun, we will be able to understand how kofun can be used as a way of life and living that continues into the present day. We were able to confirm that it is possible to position them in the history of livelihoods and to construct the concept of a cultural landscape derived from kofun. The secondary uses and ways of kofun are: <Type A: Use and way of being as a transportation function, regional base, and living base>, <Type B: Use and use as a means of production/resource>, and <C. There are four types: type: use and way of being as a public space>, <Type D: use and way of being as a symbolic, sacred, otherworldly, and liminal place>.

研究分野：日本中世史 地域学

キーワード：古墳の二次的利用 古墳の二次的あり方 文化的景観

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代から日本史研究に導入された社会史においては、それまで歴史学が基礎資料としてきた文献史料に軸足を置きつつも、民俗学が対象としてきた伝承やモノ、身体やしぐさ、心性や認識の世界を分析の対象とするようになった。さらに、1990年代に確立した荘園総合調査や村落景観論では、景観要素となる微地形や用水などの土木構造物、石造物、地名、植生までもが広義の歴史資料として捉えられることになった。社会史の視点と、景観論的手法によって、古墳を単に遺跡(過去の土木構築物)としてではなく、地域社会中で何らかの機能性・象徴性・資源性をもった景観要素として捉えることが可能であると着想した。

古墳は後世、古墳時代本来の意味と機能とは無関係な価値を付与され、地域社会の中で活かされながら存在し続けてきた。つまり、古墳は二次的利用という履歴をもつ遺跡である。そこから、地域社会が古墳をどのように認識し、どう残してきたのかという「古墳の履歴書」という理解が生じる。「古墳の履歴書」とは古墳に内包された、考古学的方法では抽出できない多様な景観情報(歴史民俗的情報)を抽出し再記録することが必要であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、古代古墳が築造時意味と機能が忘却、改変されてもなお、長い年月の中で残されてきたことを問題視する。それは、そこに古墳をめぐる人や共同体の認識の世界や、古墳の二次的利用という新たな価値が展開している可能性があるからと予想できるからだ。日本の伝統的地域社会が古墳をどのように認識し、どう残してきたのか、その具体像の把握を通して、古墳を対象とした地域資料体系の再構築を目的とする。そのためには、考古学的な資料論に留まらない、古墳のもつ歴史・民俗学的情報の資料化が必要であり、そのことの方法論的挑戦である。

古墳の二次的利用という観点は、それが考古学的には遺跡の破壊・改変・転用であっても、社会史的な関心からは明らかに景観資源の再利用という文化的営為として理解しようとすることである。考古学的関心からは破壊や転用としか評価されないが、社会史的視点と景観論的手法を用いることで、文化性を付与され、新たな資料的価値を生み出すのである。

本研究は、これまで考古学的が積極的に語らなかった「もうひとつの古墳文化論」である。古墳は単に過去の遺跡として残されてきたわけではなく、地域社会の中で二次的な意味や機能(交通・拠点・ランドマーク機能、生産・生業・資源供給機能、公共的な場の機能、神聖性・威信性・異界性など)を付与されながら今日まで活かされてきた。古墳の二時的な意味や機能は、地域の景観を観察し、歴史資料や民俗事象を調査することで知ることができる。本研究ではその調査記録を「古墳の履歴書」とし、方法論的基礎とする。そして、そこから共同体のあり方や地域の景観形成の特質を通史的に捉えることで、地域史研究の新たな方法論を構築することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究フィールド

本研究は群馬県域を主要な調査研究フィールドとする。群馬県は東日本で最も古墳が密集していることから、「古墳林」や「境内古墳」などの特異な古墳景観が随所に存在する。もとより、古墳研究がさかんで、古墳に関する考古学的基本情報(数量・位置・希望・類型)が豊富である。特に県の主導で「古代東国古墳文化事業」が推進され、「古墳県・群馬」を標榜していることから、古墳に対する県民の関心が高く、文化財の活用、観光との連携も進んでおり、研究成果が社会貢献に結びつき易い。さらに、県教育委員会が、2012年度から2016年度までに実施した群馬県古墳総合調査の成果があり、群馬県内の古墳1万1000件あまりの情報(滅失も含む)がすでに集積されおり、容易に活用できる。これを最大限活用することで、歴史民俗資料化が可能な古墳を確実に抽出できると見通した。

### (2) 実施体制

#### 古墳の履歴書研究会

古墳に由来する文化的景観の資料収集と検証を総合学的に実施するために、歴史学・考古学・民俗学・地理学による研究協力体制(研究協力者16名)を組織して実施した。

### (3) 実施方法

## 古墳の履歴調査

群馬県は東日本で最も古墳が密集しており、すでに古墳に関する考古学的な基本情報(数量・位置・希望・類型)が集積され、利用可能な段階にある。「古墳林」や「境内古墳」など、特異な古墳景観が随所に存在する群馬県域の景観の文化性を究明する。

### 定例研究会

任意の課題設定による研究報告、及び古墳の二次的利用に関する調査を行う。特に地域学の担い手確保の観点から、県内若手研究者の育成と地域史(地域学)的な協力体制の構築を目指す。

### 公開研究会

古墳の履歴書研究会以外の参加を募り、調査・研究の検証と深化を行う。

### 巡見

県内外の事例の実地踏査を行い、見識を深める。

### 総括と公表

古墳の二次的利用に関する調査(基礎調査、重点調査)の成果を、『古墳の履歴書調査研究報告書』として刊行し、公表する。

## 4. 研究成果

### A 研究の経過

#### (1) 実施期間

2020年度から2023年度まで(4か年度)

#### (2) 活動内容

##### 2020年度

##### 第1回研究会

2020.11.15(日) 13:00~17:00 群馬県立女子大学 2号館・第3講義室

報告1 考古学が語らなかったもうひとつの古墳文化 遺跡認識学への誘い

櫻井 準也

報告2 古墳を畏怖する人びと 群馬の古墳伝説

佐藤喜久一郎

##### 2021年度

##### 第1回巡見

2021.8.14(土) 13:00~17:00 安中市・高崎市内

築瀬二子塚古墳・築瀬八幡平首塚を見学

群馬県立歴史博物館において、第103回企画展「古墳大国群馬への歩み」、国宝展示室(群馬県綿貫観音山古墳出土品)を見学

##### 第2回研究会

2021.9.18(土) 14:00~17:00 オンライン

報告1 古墳に関する「景観」概念適用へ向けて 宮田 圭祐

報告2 中世史料の中の古墳 中世の古墳をめぐる 地域の視座 は可能か

築瀬 大輔

##### 第3回研究会

2021.12.4(土) 13:00~17:00 前橋市中央公民館 506 学習室

報告1 古墳と景観

ランドマークとなった古墳抽出のための可視領域分析の試み

今城 未知

報告2 村落景観における古墳群

小嶋 圭

報告3 庭園としての古墳の利用

足立 佳代

## 第2回巡見

2021.12.5(日) 10:00～16:00 太田市・邑楽郡千代田町内

テーマ「境内に古墳を取り込む中世寺院」

太田市新田荘歴史資料館、長楽寺境内及び文殊山古墳(国指定史跡・新田荘遺跡)、円福寺境内及び茶臼山古墳(国指定史跡・新田荘遺跡)、光恩寺境内及び堂山古墳を見学

## 第4回研究会

2022.1.29(土) 14:00～17:00 オンライン

報告1 古墳に託して語られた中世

近藤 聖弥

報告2 近代社会における古墳認識の変容

群馬県地域の歴史編纂物の記述を中心に

佐藤 有

## 第5回研究会

2022.3.5(土) 14:00～17:00 オンライン

報告 平安時代の古墳と陵墓

高橋 人夢

## 2022年度

### 第6回研究会

2022.5.21(土) 13:00～17:00 前橋市中央公民館 506学習室

報告1 初山まいりの習俗と初山団扇

鈴木 英恵

報告2 古墳の在地的名称の考察 『群馬県古墳総覧』掲載古墳の分析

長谷川明則

報告3 地誌に見る江戸近郊の塚と古墳

田中 健司

### 第3回巡見

2022.5.22(日) 10:00～16:00 前橋市内

テーマ「前橋台地の崖線と古墳のある村」

群馬県立文書館において関係絵図を閲覧。前橋市街地周辺の古墳(天川二子山古墳ほか)及び景観を観察

### 第7回研究会

2022.7.16(土) 14:00～17:00 前橋市中央公民館 506学習室

報告 古墳時代の人々が意識した領域について考える

深澤 敦仁

### 第4回巡見

2022.8.26(金)～8.28(日) 大阪府・奈良県内

四天王寺伝茶臼山古墳出土石棺、茶臼山古墳/徳川家康・真田幸村本陣跡(以上、大阪市)、大阪府立狭山池博物館/狭山池出土石棺転用樋管(河内長野市)、叡福寺及び叡福寺北古墳、太子町立竹内街道歴史資料館、孝徳天皇陵、推古天皇陵、用明天皇陵、通法寺跡/源頼信・頼義・義家墓、壺井八幡宮(以上、太子町)、達磨寺と達磨山古墳群(王寺町)

### 公開シンポジウム

2022.10.30(日) 13:00～17:00 群馬県立女子大学 2号館 第1講義室

報告1 古墳に神仏を祀るといふこと 群馬郡下滝村とお伊勢山古墳

小嶋 圭

報告2 近世村落空間のなかの古墳 緑都郡上落合村と七輿山古墳

佐藤 有

報告3 天明の打ち毀しと古墳に結集する人々 佐位郡波志江村と愛宕山古墳

築瀬大輔

報告4 江戸の大衆と名所化する古墳 江戸近郊古戦場の古墳

田中健司

報告5 豊城入彦命がいなかったころ 佐位郡八寸村と権現山古墳群 佐藤喜久一郎  
報告6 発掘調査で見つかった信仰の場としての古墳  
群馬郡総社町と蛇穴山古墳 小川卓也

意見交換

#### 第8回研究会

2023.1.28(土) 14:00~17:00 群馬県立女子大学 2号館 第1講義室

報告1 古墳の在地領主 中世武家本拠と言説形成 渡邊 浩貴

報告2 古墳を再利用した中世墓域 伊勢崎市西上之宮遺跡の調査成果から 川口 亮

#### 第5回巡見

2023.1.21(土)~1.22(日) 岡山県・広島県内

網浜茶臼山古墳、神宮寺山古墳(以上、岡山市)、両宮山古墳・備前国分寺跡(赤磐市)、吉備津神社、岡山県古代吉備文化財センター・中山茶臼山古墳(以上、岡山市)、最明寺板碑・二子塚古墳、広島県立歴史博物館、福山市鞆の浦歴史民俗資料館(以上、福山市)

#### 2023年度

『古墳の履歴書調査研究報告書』の編集・刊行

#### B 研究の成果

本研究では、古墳の履歴調査を集成し、古墳の二次的利用・二次的あり方を類型化した。その結果、本研究において古墳の二次的利用・二次的あり方の類型的理解として仮説的に前提としてきた次の4類型が、地域古墳(地域の中で活かされて古墳)に由来する文化的景観の意味と価値を捉える指標として有効であることが確認できた。

##### A 類型：交通機能・地域拠点・生活拠点としての利用とあり方

古墳を一里塚やランドマークのように交通施設として転用したりする場合、中世の城館の一部に転用したり、近代の軍事施設として利用されたり、火の見台を設置して防火・消防施設として機能しているような場合、墳丘を宅地や庭園に、石室を住居や物置などに利用しているような場合を言う。

##### B 類型：生産手段・資源としての利用と利用

墳丘上の森林を用益林として計画的に管理したり(古墳林)、草地や茅場として利用したり、さらに墳丘面を畑地や果樹園として再開発したり、周濠を水田・灌漑施設としての利用したりする場合を言う。石室を畜産施設として利用したり、作物や蚕種の貯蔵、醸造施設としての利用したりしている場合もある。古墳築造の資材である石材や土砂が土木資材として再利用される事例は実に多い。

##### C 類型：公共的な場としての利用とあり方

公共的な場とは、公衆に向けての記念・顕彰の場、開かれた公園や広場、名所や眺望・観光との関連付け、学校や公民館などの公共施設、天皇・皇室との関連付け、災害対応の場としての利用などがある。

##### D 類型：象徴的・神聖的・異界的・境界的な場としての利用とあり方

社殿・堂宇、供養塔、墓域、神話・伝説、祭礼の場として認識され機能している場合である。多くの場合、勧請された神仏の名が古墳名に反映されることになる。また、古墳だけでなく、石室も重要な構成要素となっており、「穴」にちなむ伝承や禁忌も多い

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)   | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 足立 佳代<br><br>(ADACHI KAYO)  |                       |    |
| 研究協力者 | 今城 未知<br><br>(IMAJO MICHI)  |                       |    |
| 研究協力者 | 小川 卓也<br><br>(OGAWA TAKUYA) |                       |    |
| 研究協力者 | 川口 亮<br><br>(KAWAGUCHI RYO) |                       |    |
| 研究協力者 | 小嶋 圭<br><br>(KOJIMA KEI)    |                       |    |
| 研究協力者 | 近藤 聖弥<br><br>(KONDO SEIYA)  |                       |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 櫻井 準也<br><br>(SAKURAI JUNYA)     |                       |    |
| 研究協力者 | 佐藤 喜久一郎<br><br>(SATO KIKUICHIRO) |                       |    |
| 研究協力者 | 佐藤 有<br><br>(SATO YUU)           |                       |    |
| 研究協力者 | 鈴木 英恵<br><br>(SUZUKI HANAE)      |                       |    |
| 研究協力者 | 高橋 人夢<br><br>(TAKAHASHI TOMU)    |                       |    |
| 研究協力者 | 田中 健司<br><br>(TANAKA KENJI)      |                       |    |
| 研究協力者 | 長谷川 明則<br><br>(HASEGAWA AKINORI) |                       |    |
| 研究協力者 | 深澤 敦仁<br><br>(FUKASAWA ATSUHITO) |                       |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|--------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 宮田 圭祐<br><br>(MIYATA KEISUKE)  |                       |    |
| 研究協力者 | 渡邊 浩貴<br><br>(WATANABE HIROKI) |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |